

日本光学会設立にあたって

日本光学会会長 黒田 和 男
(東京大学名誉教授・宇都宮大学特任教授)



日本光学会は、昨年9月2日付で一般社団法人として登記し、本年1月より学会活動を開始いたしました。日本光学会の前身である光学懇話会は、応用物理学会の中の一組織として1952年に設立されました。その誕生から数えて63年目に、日本光学会は独立の道を選ぶという大きな決断を果たしました。新生日本光学会の初代会長に選任されたことは、大変名誉なことでもあります。と同時に、一つの学会を立ち上げ、運営することの責任の重さを見ると、身が引き締まる思いでいっぱいです。

独立したことにより日本光学会は何が変わるのか、継続することと、新たに挑戦することの両方を目指したいと考えています。今回の独立はこれまでの活動を否定するものではありません。本会はこれまでの62年間、初めは光学懇話会として、1989年に改名してからは日本光学会として、機関誌「光学」、英文論文誌 *Optical Review* の発行、年次大会 OPJ や各種講演会の開催など、学会活動を連綿と続けてまいりました。再出発にあたり、その歴史的な重み、大きな慣性力を感じざるを得ません。2015年の新生日本光学会の事業は、これまでの分科会日本光学会の事業をほとんどそっくり引き継ぎます。したがって、活動を見る限り、今年と昨年で違いはほとんど見えないかもしれません。しかし、独立することにより、すべてのことを自分で決める自由を得ました。さらには質量も小さくなり、世の中の流れに身軽に対処できるようになります。この効果は、時間の経過とともに、確実に現れてくるものと信じます。一方、これまで日本光学会がカバーできなかった領域の開拓は最優先事項のひとつです。レーザーが発明されてからすでに55年、現代光学は成熟してきました。現在では、光技術は広くさまざまな分野に浸透し、光応用技術の裾野は広大です。新生日本光学会はこの広い分野に関わりをもつ努力を怠るべきではありません。新生日本光学会の所帯は小さくなりました。じっとしていたのでは消滅しかねません。できることは何でも実行していこうと考えています。

今年にはユネスコにより国際光年 (International Year of Light) と認定され、世界中の Optics および Photonics に関連する学会や大学、企業、各種団体が独自のイベントを企画し、光の年を盛り上げようとしています。日本光学会も国際光年の事業に積極的に参加する所存です。国際光年をひとつのきっかけとして、例えば中高生や大学生に対する教育啓蒙活動にも力を入れたいと考えています。また、国際化の観点から、すでに多くの海外の光学会と連携協定を結びました。これを基に、国際シンポジウムの共催など具体的な企画が進んでいます。

学会は、会員である研究者、技術者のために存在する組織です。その使命は、最新の研究成果を発表し、討論し、普及する場を提供することにあります。さらに、学界と産業界を結びつける役割も期待されています。要するに、会員間にコミュニケーションの場を提供することにあります。しかし、場を提供しても、登場人物が不在では意味がありません。多くの会員が参加して初めて目的が達成されます。すなわち学会は、会員が参加することによって成り立つ組織です。会員皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。